

時60

356

綱島繪本
實錄
播磨隨院長兵衛一代記全

特60
356



明治十九年十月九日 内務省文部 1067



繪本
實錄
隨院長
清見
日記



白井権八
 新吉原
 至りて
 三浦屋
 の遊女
 小紫と
 馴れ合ひ





白井権八
 新吉原
 至り
 三浦屋
 の遊女
 小紫と
 馴凍む





彦坂善八
 宅お之常
 平秘術を
 尽して善
 八と討て
 手並頭ス



茲に幡隨院長
兵衛の生立を尋
ねるに肥前島原
の城主

△年々才の時庄
屋作と物あつて
投て

父
共
△

寺沢



兵庫頭殿の家臣
塚本伊織の

二子少伊太郎としり
寺沢家滅亡の後
父伊織伊太郎
と伴ひ上
野國
桐生が落着名を
長兵と改め

幽世と
送りけるも伊太
郎才ありかふ

金退
江戸
芝源助
町八百屋



我々
假令百姓野々
もとも世々
名を奉
もの働ま
來國光の刀を
取出し
紀念

久兵卫夫婦も
伊太郎が事を頼
其日終ふ空しく成
ふける其後伊太郎ハ
奴僕ノ如ク追
性質伶俐なれ久兵卫夫
婦の先心様働さけの效
當時大老酒井家の
御門(坐頭)の繪と△

止りたるも
其意
を智
し
より噂あり
所へ十才より
の小僧來り
是をえて面
白き物
り上る前目下下
痛むといひれば
諸人の舌を巻
感じ此以前
よりと本多



長兵衛不圖風の
心持
次第重なるも
伊太郎と
枕辺
招き前
の身分を語

其足五
寸釘を
打てる
もへ立

△より付
△より付
△より付

同中終大輔殿の家
横井庄右衛門
今
僧の
頓オ
と感
呼止宿
と尋ね同
道と八百屋の夫婦
面會と伊太郎と所望
幸我家運
爆名と常平



○三年なり時正保元年正月十日替
古始小庄之助の水戸侯の家来辻文次郎と
試合ふ及び小庄之助の打負も小常平
強念に思ひ巖龍が前に進み出文次郎
様と試合を願し小巖龍これと
免し立合せける双方暫時戦ひ
し小常平勝負の程も入合
れば勝負もこの常
平の手練と深く
弟子と
常
平△

と呼梓庄之助
の鍛術師匠
石川郡東齋
巖龍方へ
供いせしが
常平の替
古始終目
と放きせ
見物し内へ
帰れ夜更
て棒を以て
獨愁昔古の
怠りなく
斯心を尽す



今とて修行怠
りなく後々
一刀流 四二



達入るなり
 愛小桜井の隣ひ彦



坂善八と云鎗の師範あり
 一日主人庄右門他行の
 ると伴庄之助常平を呼ひ
 父の好む鞠を庭で蹴く
 慰むるに誤つて隣家へ
 けこみけり常平は彦坂
 方至り平に詫入しが無道
 の善八多きいねど平伏
 する常平が頭を踏く
 ともが無念をこら一日立
 戻り主人に咄しなると庄右門
 ひとりさ當惑るせあり善八
 方より又も此方常平を給
 る七と申越ける小桜井の治と

次工

幡隨院



困り果し常平少も恐る色なく
 私屈越善公戦い支度と彦坂
 至り小善八怒り声高汝命を受と
 らんと鎧おどり突くるを刀に枝受留
 双方必死と争ひ常平おどり小善首を
 切せり彦坂が弟子も家来も
 是を以て逃失す
 これおどりて
 常平死利小
 行なるを
 其頃
 幡隨院
 の住僧本多公
 歎き買受寺連帰

○学びける其頃乃小狭客あり
 て放駒四郎兵五唐大権兵五小
 佛小兵五を其の近所小居
 ける此
 三人の者
 長兵五が強き
 と挫き弱き
 を助る
 雄気ある



り境内小差置ける
 常平上人の厄女あり
 年月経血気の男と
 なり父が名長兵
 工改め専ら袂
 客の流と



了なる又淺草山の宿の
 湯灌場五郎花川
 に白鬼権次下頬
 又助と真虫の
 治兵三と三又
 の者長兵三
 の吉原の
 帰りを
 待
 △受長兵三
 △四合とくま汁
 △左右の技



付すり四合者も
 大ひふ恐れ罪
 と詫言又子分と
 るる其頃神田
 不萬屋嘉吉内
 い着の根或早雅と
 連王子参
 詣の帰道灌
 山へかうきも丟入
 の悪者お出合
 難儀の折
 長兵三来り
 此を助けより
 娘の悦び分る迄



長兵五の義ある娘が清の
 心戀慕し長兵五の志すの切
 なる小深き中
 とぞるふけの
 長兵五の情々
 考今男を磨
 く身女の忍来
 子分(對)する
 面目は彼獨
 娘の事をい
 聳取の邪
 ともなるでと
 謀とぞる
 か清の

居てもいせいの茶あり
 あり
 の



あ
 ささめ
 ささめ
 或長兵五
 自害と
 のとして
 書置と
 書置と
 或夜
 長兵五
 入書

一孤裡の
 と小柄と手裏剣
 打けるみキヤンドりて
 倒れうとれなる年歴
 十一

大狸より
 長兵五の生は
 相生と今一度見
 物を出さる
 行ける世

山賊三六
 夜明
 犯言
 長兵
 投出



長兵
 三六
 場へ
 来て
 次工

十二

東
 迷
 道
 野
 更
 夜



東
 迷
 道
 野
 更
 夜

十二



の城主松平
守殿の家臣
白井庄五郎
の一手権八
ありしが同族
切害は

立退く
みんき
道



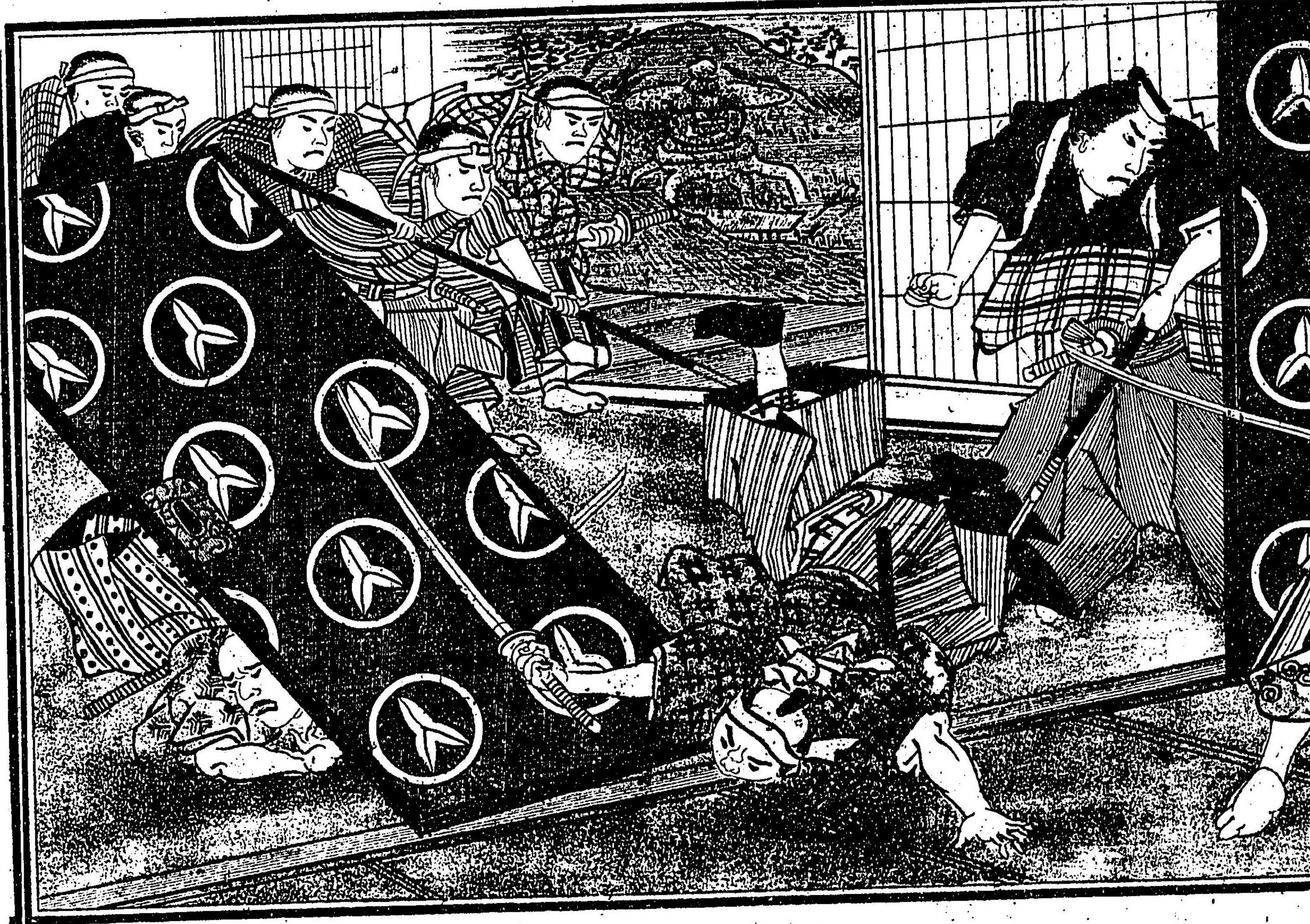
帷障院

此土儀と受との不破と立合
新し試合が
双方勝負の
唐大権
兵中又
試合貫
ひ引か
れが伴
も長兵
之の手
練を
感し
あて



水野十郎 敷まつ幡
左工門屋
随院長兵衛
衛敷人
相手不勇
とありた





水野十郎
左工門屋
敷すて幡
隨院長兵衛
衛敷人と
相手不勇
とありつた





江戸至りと東海
 子より龜山庄野の間
 を旅を殺し大金を
 ういらい日とく
 鈴を懸へ

〇いかに権八ハ
 金一丹持しといれ
 と汝ホおかる
 一はと行
 大手と廣げて立
 掛れば権八ハ
 引ぬれと高
 さい不敵の奴
 と左右より
 切てくる
 ことども
 廿二
 人と相



唄うとも辻
 かの向の松並ふ大の男
 二人焚火をほく
 居るが権八
 つく側へ寄火
 とッ貸給へと
 吸付るから
 挨拶はゆえん
 とせしを二人の前
 小立塞がり
 酒代を
 置で通
 べしと

手小
 分れも
 来りも又も
 三の荒者
 切てくれハ
 四人のの
 と引受
 と引戦ひ
 多勢ハ
 無





□内落
着有だといふ
権八もむび是
より長兵工方(列り
本庄助矣
と討る
こと亦明し
互ひひ
兄弟の
約とむす。

或日長兵工
子分と連権八(同道)
て吉原より始め三浦
屋揚り小紫といふ○

権八もむびは
ひ遂ふ八辻切
どる金銀を
とる
小紫
の方
工次

十八



△内出
弟と尋
はれた
某と
鳥取の
家中昇
権八申
者仔細あり
国元を
立退活
とも
知る△

○申者
る苦から
は我等方○

△ものともいふと申けれ我等ハ
備隨院長兵
工○

○全盛を相
さふ出しふ
権八の美男
小見とれむ
不深きり
しとる
りこれより

十八

通ひる。茲本庄助大夫の子供助七助八の
 敵討んと江戸へ来り兄弟所
 尋子居るは権八面と深あ
 笠を冠往来あけふ下谷坂本辺
 助八不行合し権八遣さじ車
 さうも後より切り付れ何の
 堪へたさ成て失しり
 権八跡を暗に帰りけ。
 此と長兵子語まはるく不具
 気之甚卑方の振舞ありとさ
 さま意見とてこれより兄の助七か
 尋常の勝負し給と誠しめけ。斯
 て助七弟の討れ泣く土手下の常



観寺といふは葬り早初七日
 の寺参をせんと井戸まで
 釣瓶を

手操り
 しど又も
 やそれと
 見と後より
 首を斬り
 の中へ
 斬る
 とし其依そ
 を立銀きり

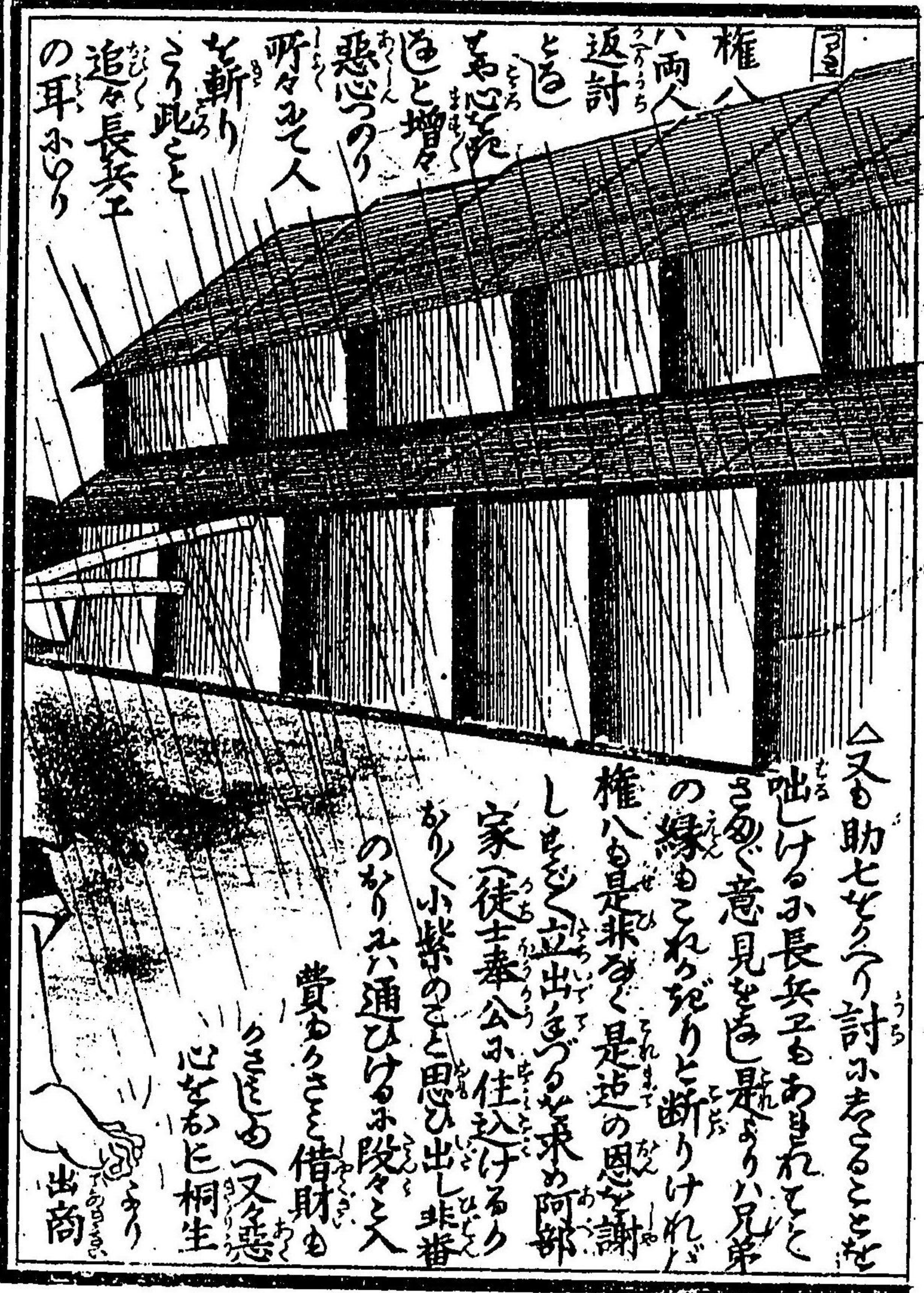


渠帰る
れい意
見せん
と思ひ
し所
権八
帰る
来り
かへ

世絹
る持
出
多の拂
受り
国帰
熊谷堤
待受是
と殺と
金子
ひより退
王次

雨

二十



権八
返討
と道
悪心
道と増
悪心の
野々人
と斬り
と此と
追々長
の耳より

△又も助七と討つることを
出けるも長兵もあはれと
さぐり意見は是れより兄弟
の縁もこれを知り断りけれ
権八も是非は是迄の恩を謝
しむと立出まづるを求め阿部
家(徒士奉公)住込ける
かり小紫の思ひ出し非番
のかり通ひける段々入
費のり借財も
心さるに桐生
出商

雨



せりなりそれ人殺しとわ
 れし権八漸くのれが最早
 人相書をのりそ
 けり余儀
 る大坂
 五尺の
 體の置とるな
 つひ大坂町奉行
 自許をける直小
 網乗物小乗江
 戸表送らる東海
 道を藤澤駅不着其夜驚



固の人々を欺き逃去て江
 九十年も忍び
 吟味のつと自
 訴するふたじ
 長兵五
 夫より目黒
 風呂寺も
 随川
 取

△翌日奉行所自訴
 迄つひ御處刑



長兵衛権公の死體を盗り目黒風見寺
 葬りし事小紫いこの事と大い小敷と風見寺
 へ参詣して其場小自害して果てりし事と
 長兵衛或時吉原小行仲の町の引手茶屋へ文
 字屋へ至りし事毛氈をたぬ酒肴を取散しあり
 事亭主の事小今日は旗本の水野十郎左門
 さまの御目かきとありし事
 小成りといふ長兵衛悦ひ
 水野さまの御目かき
 くらき幸ひの事ありし事
 あらば御目かきと件
 の毛氈の上小真裸にと打臥ける事
 主の気さかしくいふと長兵衛帰る事
 頼りけりといふ此店へ迷惑いけぬ事



心配なまの事と高いびきまで
 取けりし事水野立
 くらき幸ひの事ありし事
 かし小亭主の事ありし事
 から此の侠客の幡隨院
 長兵衛と二者かきと告げし事
 小十郎左門思ひの外
 機嫌よくとて
 思案
 吹らす事



目撃の元
きびき自若

水野其

剛気

長兵
を呼起しけらふをた起上
り衣服を着し無礼を詫
言ふ挨拶は双方ふちけ



酒宴は水野に向

今日さうらべ
御目まくら難有

就云

◎嗜好物
の口差

あが

水

の我

冷麦

天工



好物といふものか
 子分をばらばせ平軒
 一西の都合平命の
 冷むたと伸の町
 の西側山と
 水野の
 一物あじが
 相違しう

△いとも水野の爲ふ欺む
 うれ命をおとせいとがむ
 男子を其後子分の者

水野の帰を待
 受耳鼻を
 切りふさ
 け子分
 等召捕れ
 遠島と



其後母々
 長兵士
 追うう
 遂に長兵士突殺し
 けらうふ勇ま

野の我屋
 風呼び
 四方

△水野
 △家
 △断
 △

御届明治十九年九月一日
 馬喰町三丁目番地
 出版人 綱島龜吉

特60
356

092645-000-8

特60-356

幡隨院長兵衛一代記

綱島 龜吉 / 刊

M19

DBP-2372

